

学びは出会い、気づくことから始まる...

～ナレッジコミュニティ TKFの実践を通して～

有限会社 カヤ 平井良信
(奈良高専電気工学科 72 卒)

1. はじめに、ナレッジコミュニティとは

「教育」とは教師が学生に一方向的に行う行為を行うように見える。しかし、私は「教育」とは教師と学生が互いに学び合う事であると信じている。もちろんその中では、学生同士の学びがあり教師同士の学びがある。それぞれのなかで学び合う状況が存在するのであり、つまりすべての人間が存在するところに学び合いはあるのである。学び合うことは理解し合うことであり、これは人間としての最高のコミュニケーションでもある。

その学び合う関わり方の状況と一定の範囲のことをここでは「ナレッジコミュニティ」と呼ぶことにする。それは一つのクラス、ひとつの学校でもよいし、一つの村、町でもよい。ひとつの「想い」の届く範囲でもよい。単位はどんな形でもよいのである。

「教育」特に「高専に於ける教育」に対して門外漢である私が唯一論ずることができるのは、人間の存在の根元から発する上記の仮定に基づくことであると信じて、ここに記す。

2. 「教育」との関わり はじめの一步

まずは私自身のことからお話ししよう。32年前に奈良高専電気工学科を卒業したが、就職も大学進学もせず全く違う分野の専門学校へ行った。そして、半年もせずその専門学校を辞め、全く別の業種に就職し結婚。7年後の29才でまた職種を変えて映像の制作会社に就職した。それ以来18年間営業プロデューサーとして勤め、1998年に独立し現在に至っている。

そして、5年前に小学校で使用する英語の教育用コンテンツのソフト制作時に始めて「総合的な学習の時間」のことを知ったのである。その瞬間、これは大変なことだと感じたことを昨日のことに覚えている。それは、総合学習が教科書もなく各学校で自由にやって良いというカリキュラムであり、先生方が今までと違った総合学習に対処出来ないと感じたのである。何年も何年も教科書を使った一斉授業をしてきた先生がいきなり何の手本も無く、自由勝手に何をしてもよいといきな！言われても戸惑

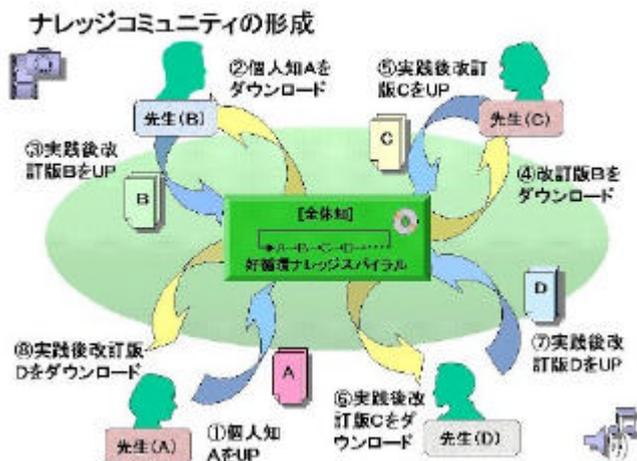
うのは当然のことである。「情報」「国際理解」「環境」「福祉・健康」「地域」などを扱う総合学習はこれまでの教科学習とは全く違う概念を持っているプロジェクト学習で、異なる能力が必要になってくるのである。それは、未経験の事柄に挑戦する精神力を持ち、交渉能力やコーディネート・プロデュース能力を必要とするのである。また教えるという一方通行ではなく子どもたちと一緒に学ぶ姿勢が要求されているとも思った。すなわちこれらはもっとも教師が不得意とする分野でもある。

何人かの教育関係者に聞いたところ、やはり困惑しているという意見が多かった。そして、私の考えを実践する場であるTKF (Teacher's Knowledge Forum) に賛同を得て、2000年11月にホームページを立ち上げたのである。

それではここで「TKF (Teacher's Knowledge Forum) - 総合学習を考える -」の趣旨を説明しておこう。

「あらゆる事柄に興味を持ち、調べる、仮説を立てて検証する、その繰り返し。また、過程で出会う人、モノ、概念に触発される。気づく楽しさ、知る喜び、出会う感動。「総合学習」とは生徒の学習形態としてだけでなく、教師にとっても新天地となる可能性があるのだ。TKFは「総合学習」をテーマに100万人の教師、いや1億2千万人の知識と経験を結集して、「知識共同体(ナレッジコミュニティ)」を構築する事を目的として設立。多くの人たちの意見を聞き、その意見にまた意見を書き込む。自分自身を開示することから始まるのである。聞くこと、発言すること、行動することはコミュニケーションの基本である。人と人はコミュニケーションで成り立っている。教師はまずよきコミュニケーターでなければならない。」

図1はその連鎖の形態のイメージである。A教師の実践をB教師の考えでアレンジもしくは触発された形で実践する。C教師が更に押し進め、D教師はその連鎖によって新たな実践に結びつけるというもの。そして最後にAに戻るのである。

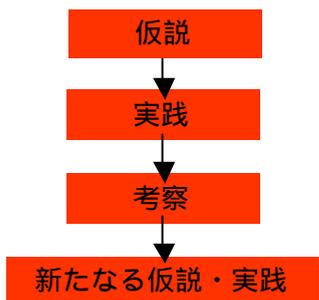


[図1] TKFの概念図

知識と知識、経験と経験が人を介して繋がっていくのである。バーチャルであってモリアルであっても、そのような教師同士において刺激し合い学び合う状況こそが必要であると考え。これは、企業が取り組んでいる「ナレッジマネジメント」の応用であり一般的な考えでもある。

一人で学ぶよりも、触発される仲間がいているんなモノがあり、相談できる先達がいることは、気持ちも安らぐし、そういった共同体のなかで学んでいくことは、迷っている状況に解決の糸口も探しやすくなるであろう。

伝えたいことがあり、学びたいことがある状況で始めて成り立つ世界。つまりお互いのコミュニケーションありきである。



[図2] TKFの行動パターン

図2は行動パターンである。行動する前には自分自身の考え(仮説)があり、それを実践し反省すべき点を踏まえて、次の新しい仮説に基づく実践へと結びつけていくのである。これは、図1と密接に連動している。つまり、上記概念は一人の中での作用ではなく、ナレッジコミュニティ全体で複数の人々の同時進行の出来事である。

ここで、TKFの具体的な活動内容を列記する。

総合的な学習の時間」のポータルサイト100万人の小中高校の教師を対象のホームページで、「総合的な学習の時間」の各種情報(カリキュラム教材)を含むポータルサイトをめざす。

ナレッジコミュニティを形成

総合学習」について教師がそれぞれの経験と知識を会員同士で共有し、そのことによって気づき、新しい取組みに挑戦し、新たな知となる好循環ナレッジを構築しコミュニティを形成する。

バーチャルとリアルな相乗効果

ホームページ上での出会いだけではなく、定期的な会合(勉強会、研修会、発表会)を通じてムーブメントとして活動する。

(参照)Teacher's Knowledge Forum

<http://www.sogogakushu.gr.jp/>

これが私のはじめの一歩であった。

3. 学びの現場から、出会いは劇的である

勝算もなく、仕事仲間の反対を押し切って始めた活動であるが、それ以来教育系のホームページを見て「会いたい」と管理者の先生方へメールを出す日々。また、メールマガジンやメーリングリストに参加して情報を収集し、時間の許す限り時には仕事もそこそこに、教育イベントなどにも参加しているような先生や教育関係者と出会ってきた。小学校、高校、大学、そして高専。そう、私は高専を卒業したにも関わらず30年間全く見向きもしなかった高専ともこのTKFの活動の中で再会するのである。ある大学の集まりの中に同じ奈良高専の後輩がいることが分かり、後日その後輩の誘いにより母校へ足を踏み入れることになる。その時の出会いがなければ、この原稿を書くことも無かったのである。出会いは時として劇的である。その教育系のO大学とは昨年3月と8月の2度に渡り教育イベントを主宰者と協同で開催した。

そういった活動をはじめ、教育現場や先生同志の研究会、教育系大学へも何度も訪問し、お話を聴いてきたが、TKFの基本である情報の共有はほとんど見受けられない。全く意識していないようでもある。それどころか、嫌悪しているような感じさせる。なぜなのか？自分の授業スタイルを見せたくないのか、自信が無いのか？あるのか？逆に人のやっていることは自分とは関係ないというプライドなのかわからない。教育の研究会にも多々出席さ

せてもらうが、実績の積み重ねが見えない。10年一日の如く同じような時点で留まっているようにしか思えないのである。

そんな中、とある高専の先生から頂いた本がある。それは「高専実践事例集」である。

【 】 こんな授業を待っていた 1994/03/24

【 】 こんな授業をやってみよう 1996/07/20

【 】 こんな授業をやっています 1998/12/20

http://www.sogogakushu.gr.jp/kosen/jissen_menu.html

28名の高専の教師の活動記録である。高専という学制が内包する問題点も赤裸々に報告した素晴らしい実践事例集である。このように教師間での問題意識 実践の共有や果敢に挑戦する姿勢は素晴らしいと思う。できればこの流れを続けて欲しいと思っている。

教師は絶えず挑戦者であり、最良の学び手であり続けなければならない。そして、自分の授業、実践を公開する事を基本にしたい。毎日の授業を全てなんの制約もなく公開するのである。誰でも見ることが出来る。学内の人たちは当たり前であるが、学外へも公開する。閉鎖系のなかでは澁むだけで良いことはない。公開することは、緊張感もあるだろうが、広く実践を問うことができ批判も含めて新しい概念に出会う可能性がある。「オープンナレッジの実践者であれ！ なにも怖がることはない。まわりは味方ばかりなのだ。」と声を大にして言いたい。

実は、昨年から思い余って、いくつかの大学で単発的に授業をさせて貰っている。テーマは私の本業である映像制作の話で、「映像プロデューサーとは ~ コミュニケーション論にかえて ~」である。最良のコミュニケーションツールである映像の制作過程やメディアの特殊性、また隠されたギミック(メディアリテラシー)、最後にコミュニケーションの大事さと私の思う真実を述べる。実際の仕事の書類や最終出来上がった映像を見せるなど、より興味を持って貰えるように出来るだけ具体的に過程を見せて行くような工夫をしている。授業を2~3回経験すると学生の気持ちの動きが分かってくる。また一方的に私が話すだけではなく最後には必ず質疑応答の時間を多めに取る。最初に宣言して置き、時間の許す限り全員に質問して貰う



[写真1:大阪教育大学での特別講義 2004/1/23]

私の真骨頂はここから始まる。私は社会人になってからずっと営業である。営業は人と話すことで成り立っている。今相手は何を考え何をしたいのか、言葉の端々や表情の微妙な変化で見抜かなければ進まない。勿論いままでの相手との履歴も大事である。その繰り返しは仕事なのである。よいもわるいもそのような状況の中で生きてきたのである。同じ様な意味で、学生がどのような質問をしても、その学生は何を聞きたいのか考え、分かるように話すのである。まともに答えては行けない。やりどの中ですぐ深く引きずり込んでいくのである。そのとき学生の姿勢が変わるのが分かるのである。それは今までそのような表現をされたことが無いからであろう。私の言葉の迫力に圧倒されるのである。別に特別な事を言っているのではなく、私の「慰み」を私の「言葉」で話しているだけなのであるが。

また、学生に感想を書いて貰うと、今度は私自身が圧倒されるのである。それは私が言った事以上の意味を彼らの中で認識しているからである。私の言葉を取り込んで自分自身の今までの経験や考えで咀嚼し彼らなりの意味を創出しているのである。彼らが今どんな立場で何を考えているのかわからないが、発信者以上のことを受信者が思うことはすばらしいことである。

私は感動している。それは私が彼らからエネルギーを貰った結果でもある。このような学び合う関わりが持てたことは私にとっても幸せなことなのである。

Education の語源は「引き出す」にあるそうだが、プロデューサーの役割にも「能力を引き出す」という仕事がある。もしくは「本人の気づかない能力を引き出すための場を提示する」と言った方が正確かも知れない。そう言った意味では、教師の能力としても大変重要なことである。

4. TKFのこれからの抱負、繋ぐそして繋ぐ

TKFは4年目に入ったが、これからはもう少し具体的な目標を持って行動していきたい。また、ビジネスとしての展開も視野に入れながら進めていくことが大事であると考えている。

学習指導案、実践事例の収集と展開

実践事例を500収集。他グループとの連携。
遠隔授業、出前授業、地域学習 (GIS使用 等)
のコーディネート

メディアリテラシー教育の推進

大学や企業を中心とした関西からの発信と
コミュニティ作り

全国高専の連携 (アクセク構築) :高専版TKF

A K SEC (All Kosen Scientific Education
Community)

理科教育での小中学校への出前授業や公開講座を開催。

高専教育の発展と 地域産官学交流のための
ネットワーク作り

プロデューサー教育 (コミュニケーション論) の
活動

高校、大学への特別講義やゲストティーチャーとして。(高校では「情報」の教科学習の一環として)

あらゆるところでいろんなひとびとの営みがある。TKFはその内の小さな一つの基点であるが、その小さな基点が他の小さな基点と繋がっていけば、それはいずれ大きなネットワークになるであろう

5. むすびにかえて、出会いを求め...

私は、初期の頃の高専という制度の中で工学教育の洗礼を受けた者であるが、卒業後一度もその専門性を生かした仕事に就いたことはない。つまりエンジニアにはなっていない。しかし、15才から20才までの5年もの間に学んだことは確実に私の血となり肉となり私の基礎を形成しているのである。そのことに50才を過ぎた現在実感している。

いま、私は映像制作の小さな会社を運営している。経営と言うよりは現場で映像制作のプロデューサーをしている。プロデューサーの仕事は、もちろんいろいろあるが最も重要な仕事は、クライアントと制作者、モノと人、概念と人を結びつける、つまり「想い」と「想い」を結びつけることなのである。高専の5年間で私はそのきっかけを学んだ気がする。人は今の私の仕事を見て、高専に行った意味がないと思われるが、私はそうは思わない。高専という学

制で工学教育を受けた映像プロデューサーがいてもいいのではないか。その方が面白そうではないか。学生時代に培ったことは永遠に消えることなくその後の人生に残るものである。方法論やハウツーではなく生きることの基本を学ぶのである。それは自信でもいい、達成感でもいい、何でもいいが、行動規範となる考え方を持った「自我」であろう。そういった意味で私は高専に行ったからこそ今があると胸を張って言えるのである。

更に言えば、私はその行動規範を今また、新しく再構築しようとしているのかも知れない。

人の価値は過去の実績ではなく、未来に何が出来るか、何をしようとしているのかである。

喜劇王チャールズ・チャップリンには有名な言葉がある。あなたの代表作はと聞かれて彼は答えた。

『THE NEXT ONE』(それは次の作品です)

最後に、私が学生へ送った言葉で締めくくろう
『...あらゆる出来事は自分の為にあると信じてください。それをどのように見て聞いて感じて、どのように考え行動するかが大事なのです。その繰り返しの中から本当の自分自身が生まれてきます。まずは積極的に「みて、きいて、かんじて、かんがえて、行動する。』

何年かかってもいいから「自分ブランド」を確立してください。...』

エバンジェリストの旅はつづく.....

もっともっと出会いを求めて.....

参考文献:

佐藤 学 「教師達の挑戦 授業を創る 学びが変わる」小学館

佐藤 学 「学力を問い直す」
岩波ブックレットNO.548

佐藤 学 「『学び』から逃走する子どもたち」
岩波ブックレットNO.524

高等専門学校の教育と研究 第9号・第3号No.35
に掲載 (2004年7月発行)

2004/05/10